

気仙沼 武山米店の「おじいさんの古時計」

災害の記憶

静かに刻む



一緒に火の中を逃げた思い出の古時計を見上げる武山佐吉さん。右は妻の栄子さん

今も昭和初期の雰囲気が残る気仙沼市魚町二丁目にある武山米店に、百年以上動き続けている「おじいさんの古時計」がある。一九二九(昭和四)年に気仙沼市内を襲った大火事の際には、当時九歳で、今は一線を退いた武山佐吉さん(八八)が背負って逃げ、難を逃れた。以来、静かに時を刻みながら店と街を見守っている。

時計は一八七七年のドイツ製。長さ五十五センチ、ポーンと音を鳴らしたという。チ、重さは約五キログラム、真す。

「昭和の大火」が起きちゆうが多く使用されて、時計が武山家によって来たのは一九〇〇年。初強い夜。店舗兼住居の武山家を巻けばきちんとして、代佐兵衛さん(故人)山家の近所から出火し

「昭和の大火」も難逃れ 100年 一家を見守る

示されて時計を背負い、約七百戸先の親類の家まで走って逃げた。「今思えば、子どもの身でこの重い時計をよく背負えたと思うが、あの時は無我夢中だった。火事場のぼ

今も、就寝前の戸締まりと火の始末は佐吉さんの役目だ。「時計を見るたびにあの日を思い出す。火事は自分だけでなく多くの人を不幸にする。気を付けなくてはいけない」と佐吉さん。長男で家業を継いだ文英さん(五七)は「気仙沼市消防団副団長」は「防災のしるし」として古時計を大切にしたい」と話している。

た。当時九歳の佐吉さんは「気付いたときには家の裏は火の海だった」と話す。

佐吉さんは父の二代目佐兵衛さん(故人)に指か力というやつだろ」と振り返る。

火事では死者も出なかったが、気仙沼市八日町と魚町、南町の九百二戸を全焼。市史に残る大惨事となった。

火災直後に建て直された家は、その後の地震などにもびくともせず七十年以上経過した。もちろん古時計も同じ時を過ごした。武山家は先日、古きよき昭和の建物として、国の登録文化財候補に申請された。

「義父(二代目佐兵衛さん)があの大火のときに家から持ち出させたのは、仏壇と時計だけ。よほど大切に思っていたんでしょう」と、佐吉さんの妻栄子さん(七七)は話す。